

初級新入生の教室外での日本語コミュニケーション状況

清水 昭子

アブストラクト

留学生の日本語会話能力の養成には、日本語による会話をより多くこなすことがその大きな助けとなる。しかし、教師は日本語の接触場面での実際の状況は十分に把握しているのだろうか。筆者は本レポートにおいて二言語教育が行われている大学における授業外の日本語接触場面傾向を調べた二つの調査を検証し、実際の授業活動へのヒントを探ることとした。二つの調査をまとめると、調査1によれば調査学生の60%が会話したいと思っており実際に9割は実行しているが、一方で教師による会話活動への要求も大きい。また、調査2によると留学生の日本語接触は多様性があまりなく、学内中心であり、そのことは時間が経過しても変化はない。ただ、個人的なコミュニケーションに関するものが加わるとネットワークの広がりができる学生もいる。以上二つの調査結果から、日本語の授業での教室活動によるサポートが重要であることがわかった。

キーワード：教室外の接触場面、日本語のコミュニケーション

I はじめに

会話能力は外国語能力の四技能の中では、運動能力の側面が強い。日本語の言語知識や会話を行うための社会言語的知識を知った上で、実際の会話の状況にあわせて的確に日本語が使える必要があるからである。この実際面での運用力(プロフィシエンシー)をつけるためには、母語話者との接触場面で、日本語による会話をより多くこなすことがその大きな助けとなる。

筆者は所属する立命館アジア太平洋大学(APU)の日本語教員有志とともに自律学習研究会(2008年~2010年)を持ち、研究会で2008年度に自律学習に関するアンケート調査を行った。^(注1)その結果、自己の学習について自己責任性が強い学生は、学習機会の活用度が高いことがわかった。これは、母語話者と学習者の接触場面の頻度は学習者自身の行動に依存するところが大きいことを示唆していると思われる。

日本以外の外国で学ぶ学習者と違い、日本にいる学習者は日本という環境の中で自然と日本語を話す機会があるだろうという考えが一般的にあるが、これに関してどの程度実証されているのだろうか。いくつか学生の日本語の接触場面に関する調査が行われているようだが、まだまだ実際の状況は捉えられていないのではないだろうか。

筆者は、APUという二言語使用の環境で日本語教師として学習者の口頭能力の養成について特に調査報告、実践報告をこれまでいくつか行ってきた。二言語教育環境での日本語学習者の日本語使用はどんな状況なのであろうか。本レポートでは、授業外の接触場面での学生の傾向を調べた二つの調査を報告し、会話能力養成の自律性を高めるための実際の授業活動へのヒントを探ることとした。

II 検証

II-1 検証のための資料

筆者は2009年度と2010年度に教室外の会話活動について以下の二つの調査を行った。ともに、大学へ新しく入った第1学期目の初級学生を対象としている。初級という限られた能力段階ではあるが、目新しい日本の高校ではない大学、日本語と英語の二言語体制での勉学という環境で、どのような日本語との接触を行っているかが、この二つの調査から窺えるのではないかと。

調査1では、会話機会について学生の態度調査(2009年入学新入生対象)を行った。会話活動についての学生の意識と授業での会話に関する学生の希望について主に調査した。調査2では、教室外での会話活動記録調査(2010年春学期入学初級既習者対象)を行った。具体的に接触機会をどのように持っているか、滞在時間が進むにつれて変化はあるか、

について主に調査した。

II-2 先行研究

二言語教育という環境での日本語学習学生の教室外での日本語接触状況について、筆者が知る限り次の二つの先行研究がある。ともにAPUの留学生を調査対象としている。

Browne & Lee (2011)は、第2学期以降の学生に対して日本人との接触状況をアンケートし、報告している。日本への留学という環境の中で学生がどのように日本人と接触しているかを調査し、二言語教育大学の利点と問題点を論じている。ここでは、日本にいながら日本語での接触が少ないことが報告されている。

片山・菅 (2010) は、初級学生 (第1学期) に対する日本語との接触状況を学生のログシート (日誌) とインタビューから調査報告している。本レポートに関わりある人的リソースだけでなく、物的リソース、社会的リソース状況について報告している。人的リソースに関してはリソースとのかかわり方を分析し、「学習者に見合ったリソースが見当たらない外的要因」と「リソースへの働きかけができない学習者自身の内的要因」を指摘している。

また、「教室外」という場所に関しては、「学習の場」としての「教室外活動」の位置について、学習者オートノミーの観点からベンソン(2011)は教室内での研究と同様に、教室の外での学習についても研究が必要であることを指摘している。由井(2005)は日本語教育分野とその周辺学問分野での具体的な「場面」を整理し、言語学習を考えると、言語使用「場面」が教室内だけにとどまらないことを指摘している。

本レポートでは「教室」は教師の主導の下に日本語を学習する場所であるが、「教室外」はその「教室」から出た学習者の日本語使用場所という定義をしておく。

III 調査1から検証したこと

III-1 調査1の資料について

調査1は、前述の「自律学習研究会」の活動の一部として、筆者個人でアンケート調査を2学期にわたり、それぞれの学期の新入生に対して行った結果である。学期の初めと終わりの2回春学期、秋学期ほぼ同じ内容に関して行った。春学期は韓国語母語学生が秋学期は中国語母語学生が中心となっているため、母国語の違いによる結果の違いを見るためである。

対象レベルは日本語ゼロスタート2クラス (Aグループ) 42名、初級既習2クラス (Bグループ) 31名、計4クラス73名である。国籍・地域は韓国21名、中国24名、台湾4名、非中国非韓国20名 (タイ5名、ベトナムとインドネシア各4名、アメリカとバングラディッシュ各2名、パプアニューギニアとブルネイとサウジアラビア各1名) である。

AグループとBグループは、日本語発話能力がBグループは既習者クラスのためある程度高いという違いはあるが、どちらのグループもほとんどの学生は、大学に入るために初めて日本へ来た。

アンケート1は各学期の初めに行い、4クラスとも同じものをウェブアンケートで行った。その内容は、学習者の言語学習および会話に対する態度に関するものである。これにより学習に関する責任の度合いを知ることと、会話についての授業初めの態度を知るためことができる。回答は選択方式と自由回答形式とがある。本レポートでは、会話に関するものだけを資料とする。

アンケート2は、学期終わりに紙媒体で行った。授業内容に関する質問と会話活動に関する態度に関するものである。Aグループは同一のもの、BグループはB1クラス分では会話機会に関する項目が一部欠けているが、全体の項目は4クラスで統一している。回答はすべて自由回答形式である。

III-2 調査1の検証の観点

新入学生は、初来日の学生が多く日本社会は未経験である。そのため、入学後日本語を使って日本人とコミュニケーションすることに積極的であるようである。しかし、実際どのように活動しているかについて全体的な把握はできていない。活動の様子などさまざま知る必要があるが、研究会では、モチベーションとの関係が主なテーマとなっていたので、「会話したい」という気持ちがある学生が、実際にどの程度積極的に自ら機会を作っているかを中心に調査した。

資料の調査1では、会話をするという会話を活動の機会と関連してどのように考えているか、を中心に行っている。アンケート1から、①会話が上手になるためには何をしたらいいと思っているか、②授業では教師にどのような要望を持っているか、により授業開始直後の学生の態度を探った。アンケート2からは、③上手になるために何をしたらいいか、④授業ではどんなことをしてほしいか、によりコース受講中の実際の学生の活動と授業に対する態度を探った。

日本語で実際の用を足せる会話力（プロフィシエンシー）をつけるためには、「言語知識」「会話を進めるための知識」の上に、実際に会話をすることが必要である。しかし、授業内での練習だけでは、質量ともに十分とは言えず、授業外で学生自身が会話機会を作り実践しなくてはいけないのである。また、教師も学生の教室外の会話活動を促す方法を授業内に取り入れていかなくてはならない。そのためには、日本で学習する学生がどのように会話機会を作っているか、会話機会を得てどのように考えたかを知ることがまず必要なことである。

III-3 結果と検証できたこと

III-3-1 会話に対する態度1…コースのはじめ、アンケート1

アンケート1からは、学習者である学生は全体的に、会話練習に関してどのような考えを持っているか、教師に対してどのような期待を持っているかを探る。

まず、回答した学生71名のすべてが「日本語で話すことは楽しい」「会話が上手になりたい」と回答している。会話に対するモチベーションはきわめて高いといえる。次に、「会話が上手になるために何をしたらいいですか」（項目6-5、自由回答）という質問に対して、回答者71名のうち43名が「日本人と話す」と答えている（60.5%）。学生の過半数は実際の会話活動が会話能力を伸ばすのに必要であると考えているのがわかる。これは、既習未習、国別ともに第1位の回答である。さらに、「先生にどんなことをしてほしいですか」（項目6-5）という教師に対する要望では、授業で話す時間を持つこと（26名）、交換クラスを持つ（5名）、その他、実際に話すことに関する項目（7名）など、話す活動に関するものが合計38名と過半数を超えている（53.5%）。

III-3-2 会話に対する態度2…コースの終わり、アンケート2

III-3-1と同様に、アンケート2から会話練習に関する学習者自身の活動と授業への評価を探る。まず、「上手になるために何をしましたか」（項目4-3）に関して、49名（3クラス分、B1クラスのアンケートに項目なし）中27名が「日本人と話した」（55.1%）と回答し、過半数を超えている。2位以下は「ドラマを見た5、友達を作った2」などであった。また、「自分がしたことで話すために役に立ったことは何ですか」（項目4-3-1）に関して68名（4クラス分）^{注2}中30名が「日本人と話す」と回答している（44.1%）。既習未習を問わず第1位の回答となっている。第2位は、教室での会話、プレゼンテーション活動など授業内活動であった。次に、「先生にどんなことをしてほしいですか」という質問（項目4-4）には、教師と話す17名（34.7%）、授業での活動を増やしてほしい13名（26.5%）となった。

III-3-3 アンケート1とアンケート2からの考察

この二つのアンケートの結果から考えると、日本語が上手になるには日本人と話すのがいいと思っている。そのためには半分以上の学生は、教室で話す時間がほしいと思っている。そして、日本人と話したいと思っている学生の90%ぐらいいは、実際に日本人と話している。しかし、日本人との会話が実際に役に立つと思った学生は、4割強になっている。一方、教師との会話、教室での会話活動を希望している学生は約6割いることになる。

つまり、調査学生の60%は会話したいと思っており9割は実際に実行しているが、一方で教師による会話活動への要求も大きい。このことから、教室外会話活動と授業での活動の連携をうまくすれば、学生が会話機会を自ら求める方向へとさらに促すことができると思われる。

IV 調査2から検証できたこと

IV-1 資料について

調査2は2010年春学期入学初級既習者1クラスの内16名に対するアンケートインタビューである。調査対象クラスの学生のうち入学以前に日本の高校で1年交換留学をしていた学生が1名おり、この学生は既に日本語での十分な会話経

験があるので、日本滞在経験がほとんどない学生に対する調査という今回の目的から見て対象から除外してある。

16名を日本語学習によって分けると、①自国の中学校か高校で半年から2年学習しているものが5名で、そのうち日本での旅行経験、ホームステイ経験が各1名あり、まったく初めて日本に来た学生は、3名である。②もう一つのグループは、来日直前に1ヶ月から1年日本語を学習した学生で11名いた。来日経験は旅行・修学旅行により経験がある学生5名、まったくの初めての学生6名であった。また、調査対象学生の国籍は、韓国12名、台湾3名、タイ1名である。

資料としたものは4つあり、

① 日誌1…会話機会に関する日誌^(注3)

4月23日(第2週4日目)から5月20日(第6週3日目)1週間1枚で、4回分

②インタビュー1…個々の学生に日本語学習歴、会話に対する態度に関するインタビューをしたもの

③日誌2…第2クォーター^(注4)に入ってタスクとして課した教室外での10分会話日誌1週間分

④インタビュー2…③10分会話日誌を基に会話についてインタビューしたもの

IV-2 調査2の検証の観点

調査2は実際にどのように日本語で接触しているかについて知るために行った。それぞれの資料の目的は次のとおりである。

①来日間もない既習学生が教室外では、日本語で会話をしているか、しているとしたらどのような状況かについてである。(日誌1)

②来日2か月ほどたつと①の状況からどう変わっているか。(インタビュー1)

③一人の人と10分ぐらい話す練習をするという授業活動としてのタスクを与えた場合、学生はどのようにタスクを達成してくるか。(日誌2、インタビュー2)本当に話すという状況を考えると、10分ぐらいの会話をする機会をどう作っていくかを考えたい。

IV-3 資料整理からわかったこと

IV-3-1 学生の会話機会の変化

学生会話日誌1から最初の第2週目と最後の第6週目の状況を比較する。

表1 日誌から第2週目と第6週目の接触状況

	第2週目	第6週目
場所	キャンパス…図書館 大学寮…(部屋、ロビー)、 学外…飲食店、大型小売店、郵便局	大学寮…(部屋、ロビー)、 学外…大型小売店、郵便局、教会
人	ガールフレンド 日本人の友だち2、ルームメイト ^(注5) ほかの国の学生、クラスメート 先輩、活動・サークルの出席者2 寮の管理人、RA ^(注6) 、図書館員 店員、郵便局員	ガールフレンド 日本人の友だち2、ルームメイト ほかの国の学生、クラスメート 先輩、活動・サークルの出席者2 寮の管理人、RA、 店員、郵便局員、教会の人
活動	寮…ご飯を作る、フロアミーティング ^(注7) 学内…サークル、コリアンウイーク ^(注8) 、ワークショップ、特殊講義 学外…遊びに行く、買い物	寮…ご飯を作る、フロアミーティング 学内…サークル、コリアンウイーク、ワールドフェスティバル 学外…遊びに行く、買い物

※特に数字を示していないものは各1人である

表1から第2週目と第6週目の接触状況を比較すると、全体として第2週目と第6週目に大きな変化はなかった。つまり、1ヶ月余りの時間経過の中では、教会へ行き、その教会の人と同じ宗教仲間の信者の人との接触が増えているだけである。この状況は場所的にも人的にも言えることである。

個々の学生を見ると、ずっとルームメイトとその友達との会話だけの学生もいる、一方、日本にはじめて来たというある学生は、第1クウォーターで一番様々な場所で、様々な人と会話を試みている。なお、この姿勢は第2クウォーターも同様であった。

また、日誌の趣旨を勉強報告と理解し、自分の勉強報告だけ行った学生がいた。この学生は教室外では日本語を使わず、教室での発話も極端に少なかった。日誌の中での「何を勉強したか」という項目に、「語彙、文法」と書いてあるところから、会話をする前の表現が足りないと思っているようだった。

IV-3-2 長く話すことについて（日誌2について）

第2クウォーターにはいり、10分ぐらい話すという会話時間を設け、相手、トピックなどについて記録をつけるタスクを課した。これは日誌1から挨拶やAPハウス（学生寮）での短い会話の記録が多いことから、長くじっくり話す機会を設け、実質的な内容のある会話を試みる目的のためである。対象学生16人の提出状況は毎日の状況を報告した学生13人で、友達との会話報告であった。そのうち、2回分だけ報告した学生は、3人であった。怠けたわけではなく、話す相手が見つからなかったため、タスクとしてできた分だけの報告であった。日本語で挨拶などはよく行っているが、常時日本語で話すという相手はいないため、タスクのために相手を探し行ったということである。

特徴をまとめると、①会話対象は友だち、知り合いに限られていた。10分間話すという活動の性質上、じっくり話せる対象は、ある程度の知り合いであることが必要になるので、広がりがないことは当然の結果ともいえる。これは、2回分しか報告できなかった学生の状況からもわかる。②APハウス以外の場面がある学生は限られ、3人だけが学内ではワークショップ・特殊講義での友人と話しており、学外では銀行、入管などの目的のある場面での会話であった。③会話内容は、目的のある会話以外には、日々の生活に関係することで、ワールドカップ、漫画、ガールズトーク、コリアンウイーク、日本語についてなどであった。

ここでの大きい変化は、日誌1の調査で、自分の勉強報告だけしかなかった学生が、友達との会話について報告しており、コミュニケーションができるようになったことである。1回目の日誌からタスクの趣旨を理解できたようで、他の学生と同じような傾向が出ていた。

IV-3-3 調査2からの考察

まず挙げられるのは、やはり接触の多様性があまりないという特徴があることである。人的にも場所的にも第2週のころから第2クウォーターへ入っても学内中心ということに変化はない。初級で第1学期目という時間の短さと学生の能力範囲から予想できたことのようにも思われる。学生個人の範囲は、入学初めのそれぞれの状況で決まるようで、「教会へ行く」などごく個人的なコミュニケーションに関するものが後から加わるのではないと思われる。このネットワークの広がりのためのサポートを考えていくのが授業での役割のひとつになるかもしれない。

会話能力を伸ばすためにじっくりと話すというタスクの結果に関しては、10分話す相手を自分で見つけるのは、学生の日本語としてのネットワークがある場合とない場合で難しさが違うこともわかった。これについては、片山・菅(2010)などが指摘しているように、「近くに日本人がいるというだけで学習リソースになるわけではない」(p.86)ので、同じキャンパスに日本人と留学生が同じ程度の割合で大学生活を送っているという環境の利点を生かすには、学生がネットワークを形成し広げていくための仕組みを、教師の立場から考えていかななくてはいけないことが示唆される。

V 二つの資料からの教育への提案と今後の課題

以上、二つの調査のまとめると、調査1からは調査学生の60%が日本語で会話したいと思っており実際に9割は実行しているが、一方で教師による会話活動への要求も大きい。また、調査2からは接触の多様性があまりなく、時間が経過しても日本人との接触範囲が学内中心ということに変化はない。ただ、個人的なコミュニケーションに関するものが

加わるとネットワークの広がりができる学生もいる。

ここから、学生が教室外での日本語接触を増やし、日本人との会話を増やしていくには、ネットワークの広がりをサポートするような授業での活動と学生の活動の連携を考えなければならないということではないかと思う。そのためには、同じキャンパスに日本人と留学生が同じ程度の割合で大学生活を送っているという環境の利点を生かすような活動を考えなければならない。そして、外での活動を促す教室活動の見直しをしていく必要がある。

この教室活動の見直しには、表現力をつけるという学習の側面と、外へ出て行くという行動の側面がある。

①表現面からのサポートは、表現の学習は何のためにするか、実際のどんな場面に、どんな状況で使えるか、学生が出合いそうな場面でどう対処するか、などが解決できる表現を提示練習していく必要がある。②接触の必要性を高めるについては、学生の自発性を高めるような行動につながる指導とその自発性が持続できるような指導が必要であり、そのために、活動の工夫が必要となってくると思われる。

また、外への促しのための活動としては、英語クラスとの交流、SALC^(注9)での学生サポートとの交流、などを考えられるが、これまで授業の中で行われているものをさらに発展させる必要がある。例えば、英語クラスとの交流を例に取るなら、一学期の中で初級の学生の問題点に絞って活動内容と学習内容の計画を立て、複数回の交流を積み重ねることが必要であろう。

学生の教室外でのコミュニケーションを考えると、示唆となりそうな学生の例を2つ紹介する。一人は、第1クォーターに自分の勉強報告だけ行っただが、第2クォーターの日記では、友達との会話に報告するようになった学生である。初めは、日本語学習の目的が「話してコミュニケーションできるようになる」とこととっていなかったようであった。このように、日本で日本語を学習する学生の中には日本語学習を外国語の学習として捉え、他の授業科目のように知識をつけることが目標だと考えているが学生もいる。日本での日本語学習は、日本の大学で学ぶ学生にとっては第2言語の学習であることを理解する必要がある。その意味でも教室外での会話活動を促し、気づかせる必要がある。

また、もう一人は、学外の様々な場所で様々な人と積極的に会話を試みていた学生である。この学生は日記の中で「日本語で話せること」が楽しいと述べていた。しかし、残念なことに、積極的に話していることが能力の上の段階である「段落を作って話す」ことにつながらず、学期の最後でも質問に一言一答では答えられるが、段落で話すことができないという段階にとどまってしまった。学生の積極さと能力の伸びがにつながる指導が必要であり、これは教室内での工夫指導が必要なことを示唆しているのではないかと。

以上、本レポートでは、初級の新入学生に対しての調査を基に学生の教室外での日本語接触状況とそこから示唆される授業への提案を述べたが、今後の調査課題として、学習が進んだ上級段階では学生はどのような教室外での日本語接触があるのだろうかという問題がある。これも今後調査すべき点ではないかと思っている。

注

1. 研究会の成果は、2009年春社会言語科学会全国大会予稿集を参照されたい。
2. この項目には無回答者が3名あった。
3. 2010年の菅、片山の研究会で菅氏が作成したものを使用している
4. APUは春秋2学期制であり、言語科目は15週のセメスター制が取られているが、言語科目以外は授業7週のクォーター制を取っている
5. APUでは、新入生は原則学生寮APハウスで生活する。寮の部屋は、一人部屋（シングルルーム）と日本人学生と留学生の二人部屋（シェアルーム）がある。シェアルームは、お互いの反対言語（英語）と日本語）の使用機会をふやす目的で設けられている。
6. RAはResident Assistantの略で、寮での共同生活がうまくいくよう、新入生の生活指導の相談を行うため、先輩学生から選ばれる。日本人も留学生もいる。
7. 寮生活での問題を話し合い、規則などの徹底を図るために定期的に行われている寮生の会議のこと。使用言語は

日本語と英語であるが、どちらが優勢であるかは、メンバーと議題により異なる。

8. APU は 50 カ国以上の学生が集まるため、学期中に言語ごとに 1 週間のマルチカルチュラルウィークと呼ばれる文化週間があり、コリアンウィークはその一つである。韓国の学生が韓国文化紹介のため様々な準備を行った。
9. Self-Access Learning Center の略。語学学習の自主学習をサポートのために行っている。日本語は学生サポートによる会話練習がある。

引用文献

Browne, K. C. & Lee, R. A. (2011). Context and Contact: the impact of a Japanese international university environment on Japanese use outside the classroom. *Polyglossia* Vol. 20, pp. 5-13

片山智子・菅智穂 (2010) 「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』19 巻, pp.79-89

フィル・ベンソン (2011) 「教室を越えた言語学習の場の考察」(トムソン木下千尋訳) 青木直子・田中賀之編『学習者オートノミー』(2011) ひつじ書房, pp.223-239

由井紀久子 (2005) 「日本語教育における「場面」の多義性」『無差』第 1 2 号 (京都外国語大学日本語学科紀要) pp.1-22